

十二月八日は、日本が、ハワイの「真珠湾攻撃」を行い、米英に対して宣戦布告した八十二回目の記念すべき日です。

日本は、あらゆる方法で、戦争を回避しようと試みましたが、米英の巧みな戦略に嵌り、開戦やむなきに至ったのです。

戦後は、GHQの日本は「侵略戦争」をした悪い国であるという贖罪意識を植え付け、「戦争犯罪情報宣伝計画(WGIP)」と呼ばれるもので、報道と教育を通じてアメリカに都合の良い歴史観を日本人に植え付けたのです。

その結果、多くの日本人は、日本人としての自信も誇りも失い、「自虐史観」の中で生きて来たのです。

そもそも、なぜ日本は「大東亜戦争」を開始したのでしょうか。

ルーズベルト大統領は、日露戦争以降から定められた「日米通商条約」を破棄して日本の石油や鉄くずの輸出を禁止することにしたのです。さらにルーズベルト大統領は、日本と交戦中の蒋介石に支援物資を送って敵対的態度をとりました。国際法の立場からも、中立主義に対する違反です。しかし、昭和二十年八月十五日、善戦も空しく、降伏を余儀なくされて敗戦の屈辱を受け入れました。

タイのプラモード首相は「日本のおかげで、アジア諸国はすべて独立した。日本というお母さんは、難産して母体をそこなったが、生まれた子供はすくすくと育っている。今日、東南アジア諸国民がアメリカやイギリスと対等に話ができるのは、一体誰のおかげであるのか。それは『身を殺して仁をなした』日本というお母さんがあったためである。」と語ったのです。

フーバー大統領は、マッカーサー大将と一九四六年五月サシで話した。私が、日本との戦争の全てが、戦争に入りたいという狂人(ルーズベルト)の欲望であったと述べたところ、マッカーサーも同意して、ルーズベルトが犯した壮大な誤りは、一九四一年七月、つまりスターリンとの隠然たる同盟関係となったその一か月後に、日本に対して全面的な経済制裁を行ったことである。その経済制裁は、弾こそ撃っていないが本質的には戦争であったと述べています。

昭和天皇は、「開戦の詔書」にも「終戦の詔書」にも、同じ発言をされています。

それは『萬邦共榮の樂しみを共にす』という、お言葉です。すべての国が、それぞれの文化・歴史・民族・信条・政策を堅持しつつ、周辺の国々との仲良くして、発展・繁栄することこそ正しい道であると論されているのです。

開戦は政府が主導し、終戦は陛下が主導されたことも、我々は忘れてはならないと思います。中小企業の我々社長が、今こそ、正しい歴史の真実を知り、日々の経営に真剣に取り組み「萬邦共榮の樂しみを共に」して参りましょう。

今月のポイント

正しい歴史を後世に伝えていこう!!

